

Desert Wind

(No.29 4月号)

LVJCC 牧師: 鶴田健次

『七転び八起き』 (第二コリント4:7-15)

「七転び八起き」という諺がありますが、これは、多くの失敗にもめげず、そのたびに奮起して立ち直ること。また、そこから転じて、人生には浮き沈みが多いというたとえです。つまり、「七回転んでも、もう一回起き上がる」ということです。人生には、浮き沈みがあり、順境の時や逆境の時があります。もちろん誰も逆境の中を通ることを望みません。しかし長い目で見れば、人生は、むしろ順境の時よりも、逆境の時の方が、私たちの益になる場合が多いものです。そこで今回は、第二コリント4:7-15の御言葉から、『七転び八起き』と題してお話をします。

土の器の中にある宝

聖書は、私たち人間のことを『土の器』と呼んでいます。これは、人間のもろくて壊れやすい性質を表わしている言葉です。また、『土の器』という言葉は素焼きの器をイメージしますが、昔はこの素焼きの器に味噌を入れたり、油を入れたり、醤油を入れたり、中にはお金を入れる人もいたようです。同じ素焼きの器でも、その中に何をを入れるかで、そこに違う価値が生まれます。ですから、この『人は土の器である』という人間理解は、非常に深い意味を持っています。つまり自分という土の器の中に何をを入れるかで人生が決まるということです。パウロは、「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている」と言いました。そして、その宝は、神の測り知れない力であると言っています。この宝とはキリストのことです。私たちは、死んだら灰になってしまうような土の器ですが、そんな私たちが、イエス・キリストを救い主として信じて受け入れるときに、この測り知れない力の源であるキリストをこの土の器の中に持つ者とされます。それは、私たちの思いをはるかに超えた素晴らしい経験です。なぜなら、それによって、私たちに永遠の命が与えられるからです。

倒れても立ち上がる人生

4章8-9節で、苦しめられても窮しない、途方にくれても行き詰らない、倒されても滅びない、と言われています。ある人が、「病床は人間最大の学校である」と言いました。また、「寒さに震えた者ほど、太陽の暖かさを知る。人生の悩みをくぐった者ほど、生命の尊さを知る。」とは、アメリカの詩人ホイットマンの言葉です。辛い病床生活の背後に神様の摂理があるということは確かですが、だからと言って、その状況を喜んで受け入れるというのは決して簡単ではありません。重い病氣にかかると、何かにつけ悲観的になりやすいものです。ところが、絶望と逆境と孤独の中でこそ、人生の真実を見出すことが出来るというのもまた事実です。それは、私たちの困難のすぐそばに神様がいらっしゃるからです。人生の試練は、新しい祝福への門であるというのが聖書の考えです。多くの場合、試練というのは、自分の思い通りにならないことを言います。しかし裏を返せば、明日のことも分からない自分の行き詰まりの経験こそが、先の先を見ておられる神様の完璧な計画を見出すチャンスなのです。

人生に対する新しい解釈

この宝を土の器の中に持つ人生、つまりキリストと共に生きる人生は、この問題だらけの世界に住みながら、同時に永遠の世界に生きる人生です。だから、私たちは、四方から患難を受けても窮しない、途方に暮れるような事が起こっても行き詰らない、なぜなら、そこには物事に対する新しい解釈、永遠の視点から見た神の国の解釈が与えられるからです。たとえ身動きもできない体になろうが、そこで初めて神様の愛に気づき、その愛の招きを受け入れることができ、頼りにならない自分を頼りにしていたときには見えなかった人生の意味と目的が見えてくるのです。それは、そういう体でなければできない素晴らしい働きが与えられることであり、さらには、やがてキリストの再臨という、人類史上、究極の出来事が起こるとき、すべての者が、この不自由な体から解放され、永遠に朽ちない完全な体が与えられて、天国に生きる者とされる。クリスチャンとは、この人生の解釈に生きる者です。だから、どんな事があっても強いのです。

DREAMS COME TRUE

- ☞ 教会堂の建設
- ☞ 敬老ホームの設立
- ☞ 幼稚園の設立

お祈りのリクエスト

日本の家族の救いのために
聖書通読マラソンのために

入門者クラスのために
英語部の働きのために
小さな子供を持つお母さん方のクラスのために
(香織姉担当)

堀田兄の神学校での学びのために

倉田一徳さんの脳腫瘍の癒しのために

神崎先生の目の癒しのために

新井雅之兄の脳内出血の後遺症のリハビリと癒しのために

病の方の癒しのために

Desert Wind では
1400 字程度のお証、また質問を募集しています。ご意見・質問等何でもどうぞ。

lvjccnews@hotmail.com

編集: 真子ガーディナー

松岡みどり

証し: 川島明日歌

神様の完璧な愛と計画の中で

私が生まれたその日から、私と共に神様は居て下さったのだと、今思い起こせばはっきりと言えます。小さい頃から、なぜか近所の子供たちが遊ぶ時に仲間はずれにされてばかりで、幼心にも戸惑いと孤独を感じていました。そんな中、私は音楽と出会いました。父が高校の音楽教師という事もあり、私の家にはいつもトロンボーンを吹く父と、おびただしい数のクラシック音楽のCDがありました。私自身もピアノのおけいこが一番幸せな時間でしたし、父と一緒にモーツァルトやベートーヴェンを聞くのが大好きでした。こどもの歌の本は端から端まで全部覚え、小学校の行き帰りや音楽の時間では誰よりも大きな声で歌っていました。そんなわけで、周りの子供たちや先生方が、「音楽といえば明日歌ちゃん」と言ってくれる程に、私の中で音楽は欠かせないものとなりました。

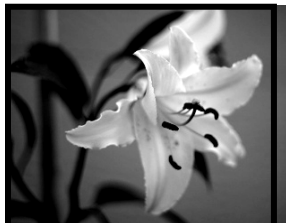
そんな中、11歳の頃、両親の離婚を経験しました。最愛の家族が壊れて行く音を、まさに割れるような自分の泣き声とともに聞きました。それから言うもの、「離婚した子供と付き合うな」と心ない親から言われた仲良しのクラスメイトたちは一転、軽蔑の目で私を見下し疎外され、担任の先生までもが、「君の両親が離婚したから、君はクラスから外されているんだろ」とクラス全員の前で無責任に言い放つような、当時の私にとって耐えられない日が続きました。所詮小学生がやる事なので、そう長くも続きませんでした。この時から私は、誰も自分のことを愛してくれないと思い込み、暗く沈んだ毎日を過ごしていました。

2年後、父はかつての生徒さんと再婚しました。私と弟にとっても小さな頃から一緒に遊んでくれる、本当のお姉さんのような大好きな存在だったので、話しを聞いた時も「このお姉ちゃんどっから」と言う安心感もありました。彼女の父は牧師先生で、実家が彼女の母教会と言うこともあり、14歳のクリスマス礼拝の日、私は生まれて初めて、彼女と一緒に教会に行き、そこでイエス様と出会いました。慣れない場で緊張していた私に教会に集う人々は満面の笑みで接してくれた上、キャンドルライトの様子は、まだ神様を知らない私でも感動する程美しい光景で、イエスキリストは本当に居るんだなあ。なんて漠然と考えながら、ろうそくの灯火を見つめ

ていました。その日を期に、私も日曜礼拝や教会行事に父や彼女と一緒に参加するようになりました。しかしその頃は牧師先生のメッセージを聞くと言うより、教会に行き、聖歌を歌い、じっと座っているだけの礼拝で、神様が一体どんな人なのかはわからないままでした。それでも、彼女のお姉さんが指導をしているゴスペルクワイヤのコンサートやワークショップと一緒に歌う時、合唱コンクールやカラオケで歌うのと違う、確かなエネルギーを感じて、私もその中で歌っていました。

教会で居心地の良さを感じる反面、家が私にとって辛い場所となってきました。母が私と弟を育てるのに必死になって、時々私たちに怒りや疲れから来る鋭い言葉の矢が向けられ、その為に弟が非行に走ってしまう事もあり、学校では高校受験前、父の学校で一緒に音楽をやろうと決めていただけで「馬鹿学校しか行けない」「所詮親のコネで」と先生やクラスメイトから散々嘲られ、自分の存在が無駄で、何一つ取り柄の無い、生きている価値のない人に思えてきたのです。何度も屋上のフェンスを乗り越えようとしたり、睡眠薬について調べたり、自分の部屋を真っ暗にして手首を切ったりしました。そんなある日、「コリアナイト」と言う、韓国の若きクリスチャン達が開いた伝道集会に参加した時、それまで見た事の無かった強い信仰の姿に驚きました。迫力のある音楽と踊りとともに繰り広げられたスキットで、初めて私はイエス様がなぜ、そしてどうやって十字架にかかったかを知り、彼らが「きみは、愛されるため生まれた。君の存在が、私にはどれほど大きな喜びでしょう」と歌ったその曲に、しばらく立てない程号泣しました。あれは神様が、私に歌ってくれたと言っても決して過言ではありません。それほどまでに私の心は震え、今までの自分本位な言動を全て、神様に向かって大声で泣きながら悔いました。

ぶどう園の主人が、午後5時になっても誰からも雇われない労働者に「あなたもぶどう園に来なさい」と言ってくれたように、こんな小さな、何も持っていない私も、神様は愛してくれるという大きな恵みに感謝しました。あの集会以来、神様は常に私の賜物と、それを発揮する場所を与えて下さり、こうしてラズベガスで洗礼を受けるまで導いて下さいました。神様の導きには無駄が一つも無い、常に最善であり完璧なんだと実感しました。これからも聖書と祈りを通して神様と深い関係を築き、そしてこの大きな愛をたくさんの人に伝えるため、日々精進して行きたいと思えます。



編集部 便り

早くも4月を迎え四半期が過ぎてしまいました。100年に一度といわれる世界的な不況の中、私たちが取り巻く環境は、政治的にも経済的にも激変しています。

毎日があという間に過ぎて行く中で、永遠に変わらないものをもっと理解するため、また神のご計画が何かを知るため、聖書通読マラソンは霊的な恵みと、聖書の真理を奥深く理解するチャンスだと思えます。

マラソンと言えば、芸人の間寛平さんが地球を一周するアースマラソンに出発したね。3月にLAからNYに向けて走り出しました。これから2年かけて地球を一周するそうです。私たちが全員で聖書通読マラソンの完走を目指すランナーになりましょう。今月も皆さんにとって恵み多いひと月でありますように。

